紫雲の空

上杉　綾子

母の納骨も済んで長い事ぼんやりとした日々を送っていた。
いつの間にか季節は巡り梅雨に入っていた。
（そういえば、ここのところ小雨が続いていたな）
そんな事にも気づかないほど、あっという間に毎日が過ぎていったのだった。
（お母さん死んでから私ちゃんと泣いてないかも）
何だか薄情な娘に思われそうだったが正直そうだった。
十年前に父が亡くなってから母と二人きりの生活を送ってきた。私は毎日仕事、仕事で忙しくしていたから果たして母に孝行らしき事をしてあげただろうか。
晩年の母は物静かで穏やかな人だった。私が小さい頃はよく昔話や歌を聞かせてくれ物静かさにはほど遠くいつもケラケラとよく笑う人だった。母は新潟の山奥で育ったらしい。らしいというのも私は母の故郷へは一度も行った事がなかった。こどもの頃はいつもどんな所なのかと思っていて、いつか行ってみたいとは思っていたのだけれど。
もうすでに故郷の村は廃村となり私の祖父母と伯母にあたる人はみな他界したそうだ。だから母も長い事帰っていなかったのだろうと思う。小さい頃、母に行ってみたいとねだったが、
「冬は三メートルくらい雪が積もって何にも出来ないの。行っても何にもする事ないし、そう簡単に行ける所じゃないのよ」
と突っぱねられた。
（だったら夏に行けばいいじゃん）
心でそうふてくされた思いだったが結局口には出さなかった。

それでも母が故郷の話をする時の顔は懐かしさと楽しさとでいつも嬉しそうにキラキラと輝いていた気がする。きっと楽しいこども時代を過ごしてきたのだろう。

（まっ、それでよかったのかも）

私は少しずつ母のいろんな事を思い返してみた。

（好きなモノって何だったかな）

花だったらあじさいで特にむらさきのが好きだった気がする。色もやっぱりむらさきが好きでハンカチとかスカーフなんかの身につける物や小物もよくむらさきを好んでいた覚えがある。

「おー」

ひとりで結構な大声を上げてしまった。今は梅雨。あじさいの盛りではないか。私の心は逸っていた。そうだ、今度の休みにあじさいを観に行こう。心はすっかりむらさき一色になっていた。

電車で一時間ほどさほど遠くないあじさいで有名なお寺へと向かった。駅に着くと平日だからか降りる人はほんの数人。休日であったらかなり多くの人が来るのだろう。私にとっては静かに散策できるのはありがたかった。今日は梅雨の晴れ間なのか朝から雨は降っていない。薄く日が射す程度だった。改札口を出ると早速あじさいが咲いていた。

白やピンク、形もまんまるで可愛い。十分程歩いていたら額に汗がうっすらとにじんできた。お寺の参道には色々な種類のあじさいが所狭しと並んで植えられていた。よく見かける物以外にもヤマアジサイ、カシワバアジサイとかツルアジサイなどの額あじさいや珍しい外国のあじさいもある。…と、あじさいの植えられている所にプレートがあって名前や産地が書かれていて私も初めて知った物ばかりなのだけれど。私は全然あじさいについては詳しくないから。

それにしても色もたくさんある。同じ白でも真っ白なのとアイボリーがかった物。濃いピンクや薄いピンク、淡い青色など。もうこれはキレイ！以外に言葉が出ない。

途中で三人組の女の子が前を歩いていた。楽しそうにはしゃぎながらあじさいをバックにスマホで自撮りをしている。彼女達を抜いて少し行くと今度は四人組のマダム達のグループ。こちらは帽子にスニーカー、そしてリュックを背負ってちょっとしたトレッキング風。もっぱらみなさん花を中心に熱心に写真を撮っている。時々あじさいをバックにして。この方達も追い抜いて私はあじさいとネームプレートを交互に見ながら前へと進んだ。

（母を連れてきてあげたかったな）

そんな思いでしばらくまっすぐな参道を歩いていると左側に見事な紫のあじさいが咲き誇っているのに気づいた。目にも眩しいくらいの鮮やかな紫。ふと、よく見るとそのあじさいとあじさいの間は人がひとりやっと歩けるくらいの小道になっていた。そちらに導かれるかのように私は入っていった。どんどん奥に進む。その間むらさき色のあじさいがアーチのように私を迎えてくれているように思えた。どれくらい歩いたのだろう。ようやくつき当たったと思ったらそこは広場のようになっていて見渡すかぎりむらさきのあじさい。そして更に正面には緑鮮やかな田んぼが一面に広がっていてそこには里山らしき集落が見下ろせた。

（こんなに高い所まで登ってきたかしら）

少し不思議な気がした。

そんな事を思っていたら、ふと背後に人の気配を感じた。振り向くと小さな女の子がニコニコしながら私に手招きをしている。健康的に日焼けした小麦色の肌と顔の三分の一くらいを目が占めているようなギョロ目さんだ。まさに眼力が強い印象の女の子だ。

「ねぇ、あそぼうよ」
「えっ？私？」
とまどう私。けれども女の子の大きい瞳に吸い込まれるかのように私は彼女に近づいた。よく見るとちょっと時代遅れの感じがする綿シャツともんぺ姿。かわいらしい。髪型も昔懐かしのおかっぱ頭。都内から一時間くらいの所でもこんなに長閑な風景と、ちょっと垢抜けない様な子がいる事に驚き、感心してしまった。
女の子は強引に私の腕を引っ張り、
「おままごとしよう。それからそのあとで、おてだまをしましょう。おかあさんがうたってあげるからね」
どうやら、もうままごとは始まっているらしい。
「はい、ごはんができましたよ。めしあがれ」
女の子は小石がたっぷり入った、ふちの欠けている茶わんを私に渡す。私は女の子のこども役なのだろう。
「のこさないでぜんぶたべるんですよ。おしゃくしょうしゃん（お百姓さんの事らしい）がいっしょうけんめいつくったおこめだからね。のこすとめがつぶれちゃいますよ」
（きっと親にそんな風に教えられて育ってきたのだろう。私も母から同じような事を言われてきた。いつの時代もおんなじだ）
「あたしがおかあさんでおねえちゃんはこどもね。なまえは、えーっとすみれちゃんね」
「えっ？あっ…あのね、おねえさんね…」
私は喋ろうとしたが女の子は聞いてはいない。お構いなしでどんどんままごとを進めている。
（まっいいか）
そしてひと通りままごとが済んだら今度はお手玉。女の子はお手玉を三つ手に取り軽々とそれを繰りはじめ

た。
「上手ねぇ」
思わず私は拍手。女の子は得意気な顔でなおもお手玉をしながら歌を歌いはじめた。
「てんからしょうじのからしょうじぃー。唐竹、唐松、寒椿ぃー、よう野菜ぃー、お芋は一升いくらかね、四十五文の五十五文―、もひとつまけねかチャカラカポーン、チャ、カ、ラカポン！」
私はそのうまさにさらに拍手。そして心の中で、
（何か聞いた事あるような懐かしいような）
「今のは何のお歌？」
私は女の子に尋ねた。
「うーん、よくわかんない。かあちゃんがおてだまするときにいつもうたってくれるの。おもしろいんだよ。さいごのチャカラカポンでこっちのおててにおてだまがぜんぶはいるの」
興奮気味に、そしてちょっと自慢気に教えてくれた。
「かあちゃんはね、いっぱいおうたをうたってくれるの。でね、とうちゃんはおこるとうーんとおっかないの。でもね、おっきなものをもちあげたり、すごーくちからもちなの。そのときはかっこいいんだよ。このあいだね、おっきなさかなをもってかえってきて、もちあげてうえからぶらさげて、ほうちょうでバーバーってさかなのおなかをきったの。そしたらね、おなかのなかからね、ちっちゃいおさかなとか、たことか、いかとかがいっぱいでてきたの」
女の子の機関銃トークは止まらない。今のはどうやら『あんこうの吊るし切り』らしい。
「とうちゃんはね、こわいときもあるけど、いろんなおはなしをしてくれるの」

「どんなお話？」
「うんとね、おこめのおはなしとか。えーっと、みのるとみのると…いなほかな、だっけっかな」
「あは、きっとそれ〝実れば実るほど頭を垂れる稲穂かな〟ってやつね。人間はね、たとえ偉くなっても、って言うか偉くなればなるほど謙虚でいる事が大切で決して人に威張ってはいけませんよ、って意味。ほら稲の穂先って実ってくると重くなって前に垂れてお辞儀してるみたいでしょ。それに例えたの。〝謙虚〟ってわかったかな？」
女の子はきょとんとした顔で、
「んー、よくわかんないけど〝いなほかな〟ってところが〝チャカラカポン〟ににてておもしろい」
（まっそんなもんか）
「すごいねぇ、よく覚えていたわね。偉いわ。おうちはこの近く？」
「あそこ」
女の子は下の方の里山にある集落の方を指さした。
「おとうさん、おかあさんはおうちにいるのかな？何のお仕事してるのかな？」
「とうちゃんは、ながーい木をこうやってすーっとやって、とんかんとんかんってたたくの」
「ん？えっ？あっ！大工さんかな？」
何だかクイズの解答者になった気分だ。女の子はちょっと首をかしげたけれど少しして、「うん」とうなずいた。そしてまた話し始める。
「かあちゃんは、はたけでおいもとかだいこんとかキャベツとかたくさんつくるの。あたしもてつだうんだよ。あのね、あたしね、おそとであそぶのがすきなの。ねえちゃんはいつもおうちのなかでおにんぎょうさ

んにおようふくきせたりしてあそんでるけどあたしはおそとがすき。でね、ここがいちばんすき。だってね、いっぱいあじさいがさいててきれいでしょう。あのね、あたしむらさきいろのあじさいがすき。むらさきいろだぁいすき」

（あっ、さっきの…）

女の子に話そうと思って口を開きかけた途端、女の子が突然、

「あっ、かえらないと、とうちゃんにしかられちゃう。おひさまがね、あのやまのむこうにかくれるまえにかえってきなさいっていわれてるの。すぐにくらくなっちゃうんだ。とうちゃんおこるとこわいもん。じゃあ、おねえちゃん、さよなら」

手を振りながら帰ろうとする女の子に、

「ねぇ、お名前教えて」

「たえ」

「たえちゃんか。私は菫よ」

「あー、すみれちゃんはあたしのこどものなまえといっしょだぁ」

そう言いながら女の子は里山への下り道を走り去っていった。

私は大きく息を吐いて元来た道を歩きはじめた。私は菫。母は多恵。お祖父さんは大工さんだったって母から聞いてた。

（おかあさん、むらさき色好きだったな）

何だか笑っているのに涙が止まらなかった。

「チャカラカポン、チャカラカポン、そうそう覚えてる。思い出した」

私の脳ミソの皺と皺の間からいろんなものが溢れ出てきた。
（おかあさん！）
私は今まで女の子といたあじさいの咲き誇るあの場所を見ようと振り返った。
「えっ⁉」
そこは何もない雑木林だった。あのあじさいはどこにもなかった。
母の幻、母の故郷。不思議な時間だった。
母が亡くなってから初めて思い切り泣いた。
溢れる涙を抑えようと空を見上げた。
夕暮れ時の空にはむらさき色の雲がいっぱいに広がっていた。

※紫雲―めでたいしるしとされ、念仏行者の臨終などにあたって阿弥陀仏がこの雲に乗って来迎するという。神仏・道教思想に源があり徳の高い天子・君子が在位する時に現れるとされる。

紫雲の空（しうんのそら）

2026 年 10 月 24 日　発行

著者　上杉（うえすぎ）　綾子（あやこ）

令和 8 年度 函南町立図書館 8 月～11 月 Y A 展示・企画冊子

編集・発行　函南町教育委員会教育部生涯学習課（函南町立図書館）

電話番号　055-979-8700

住所　419-0122　静岡県田方郡函南町上沢 107 番地の 1

当作品について転載・複製・複写・翻訳を著作者の許可なしに行うことを固く禁じます。（著作権法上での例外を除く。）また、個人や家庭内の利用であっても、代行業者等の第三者に依頼して無断でスキャン及びデジタル化することはできません。作品の著作権は著作者に帰属しますが、函南町立図書館は作品を永続的に無償で使えるものとします（主に公開にあたっての編集、印刷、配布、掲載に関すること）。ただし、当館は著作者の創作性を重視し、作品内容には関与しないものとします。また、すべての文章は原文のままとし、当館で校正・校閲作業は行っておりません。

母が亡くなってから何もする気が起きないでいた主人公。梅雨に入り母が紫の紫陽花が好きだった事を思い出し散策に出かける。そこでひとりの少女と出逢いふたりでひとときを過ごす。夢なのか幻なのか。少女はいったい何者なのか。

